



水の 声

カンボジアトネサップ湖の姿容と
脅かされるひとびとの暮らし

The Water Voice of the Tonle Sap Lake

特定非営利活動法人
メコン・ウォッチ
編著



はじめに

ミアン トゥク ミアン トゥライ (水のあるところには魚がいる)
カンボジアのことわざ

西暦9世紀のアンコール王朝の時代から、トンレサップ湖では、水に手を入れるだけで触れることができるほどたくさんの魚が生息していた。豊かな環境が、魚をはじめとする多くの生きものを育み、そんな恵みを、カンボジアに住むすべての人びとが享受してきた。世界のどの国よりも、カンボジアの市井の人びとは毎日の生活を魚に依存している。トンレサップ湖は、遠い昔から、いわば命の源であり続けてきた。

そんなトンレサップ湖が、今深刻な危機に瀕している。水質汚染、浸水林の伐採、そして、魚の乱獲。雨季にメコン河の洪水流の一部を逆流で受け入れるトンレサップ湖は、ラオスや中国で進行するメコン河上流域開発による水量や土砂堆積の変化にも影響を受けているといわれる。トンレサップ湖の天然資源と密接に関わりあいながら生きる人びとの暮らしは、当然ながら脅かされている。

日本は、1993年から一貫してカンボジアの最大の援助国であり、日本政府が大きな影響力を持つ世界銀行やアジア開発銀行も、カンボジアに多額の経済・技術援助を行ってきている^{*1}。しかし、カンボジアの人びとの生活に重要な役割を果たしているトンレサップ湖について、日本で知る機会はまだまだ少ないだろう。

私たちは、カンボジアの最大援助国の市民として、トンレサップ湖と関わりながら生きる人びとが直面している問題をもっと知る必要があるのではないか。そして、それを、援助国や援助機関が出す報告書だけを通してではなく、現地で暮らす人びとの視点から知ることはできないだろうか。そんな想いをもちながらメコン・ウォッチは、カンボジアのNGO、漁業活動連合チーム (Fisheries Action Coalition Team、略称 FACT) と協力して、普段なかなか聞くことのできない、湖とともに暮らす人びとの声を聞き取った。この結果は、FACTの代表マック・シティリット氏が作成した *The Water Voice of the Tonle Sap Lake: Fishing, Drinking, Bathing and Eating on the Water: A Story of People's Dependency on Water in the Tonle Sap Lake, Cambodia* (『トンレサップ湖の水の声：湖で魚をとり、水を飲み、沐浴し、食べる：カンボジア・トンレサップ湖に依存して生きる人びとの物語』) という英文の報告書 (Sithirith 2003) にまとめられている。

本書は、シティリット氏の報告書に掲載されたトンレサップ湖の住民の話を素材に、読者の理解をうながすための解説を書き加えて、ひとつに構成したものである。写真は、FACTとメコン・ウォッチが活動の一環として撮影したものを使用した。このブックレットが、トンレサップ湖の直面する問題や課題を認識するための一助となればさいわいである。

また、本書は、多くの人びとの協力によって発行の運びとなった。特に、住民へのインタビューを行うなど、この報告書へ貴重な情報や写真を提供してくれたFACTのマック・シティリット氏、助言や情報提供に時間を割いてくれた上智大学大学院の柳星口氏にこの場を借りて感謝の意を表明したい。

^{*1} 2004年の日本政府の対カンボジア二国間ODA (政府開発援助) は、1億2588万ドル。同年にアジア開発銀行からは7413万ドル、世界銀行からは6256万ドルが供与されている (すべて支払い純額ベース、International Development Statistics 2005)。日本はアジア開発銀行の最大の出資国であり、世界銀行ではアメリカ合衆国に次いで第2位の出資国となっている。

目次

はじめに	3
第1章 トンレサップ湖の特徴と人びとの生活	
1-1 カンボジアの心 トンレサップ湖の特徴	6
1-2 湖に頼って暮らす人びとの生活	8
第2章 変りゆく湖と人びとの暮らし	
2-1 汚れゆく湖の水と水位の変動	12
2-2 破壊される浸水林	20
2-3 魚の減少と漁業をめぐる衝突	24
第3章 問題解決に向けた動きと残される課題	
3-1 実際の資源管理に反映されない政策	34
3-2 見切り発車的に行われる資源の共同管理	36
3-3 商業漁業制度の改善の遅れ	38
参考文献	40

表記について

人名や地名のカタカナ表記については、本書のベースとなった報告書 (Sithirith 2003) の英語表記をもとに、一般に広く使われている表記を参考にしつつ、確定した。巻末の参考文献については、原著者による表記を尊重したため、本文と異なる場合もある。度量衡もすべてカタカナ表記としたが、「%」のみはそのままである。また、特に断りのない限り「ドル」は米ドルを示す。

本書は、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて制作されています。

第1章

トンレサップ湖の特徴と人びとの生活

遠いむかしから私たちはトンレサップにたよって暮らしています。生きるうえで必要な知恵は、ぜんぶトンレサップでおぼえました。トンレサップの水がなければ生きていけません。トンレサップは、魚やそのほかの資源、飲み水や農業のための水、交通手段、家や生活に必要な道具をすべて与えてくれます。

ノウン・トーンさん
(コンボントム州コンボンスヴァイ郡ネアンサウ村在住)

カンボジアの心臓 トンレサップ湖の特徴

トンレサップ湖は、カンボジア王国中央部に位置する、東南アジア最大の淡水湖である。湖の水は、全長約120キロのトンレサップ川を通して、湖の南東に位置する首都プノンペンで国際河川メコン河と合流する。その後、メコン河とバサック川の2本の川に分れ、最後は隣国ベトナムのメコン・デルタを経て南シナ海へと注ぎ込む。メコン河の上・下流、トンレサップ川、そしてバサック川が合流する地点は、クメール語で「チャト・ムック」（「4つの顔」）とも呼ばれている。「トンレサップ」とはクメール語で「淡水のひろがり、淡水の川」の意味で、メコン河もカンボジアでは「トンレトム」（「大きな川」）と呼ばれる。

乾季のトンレサップ湖の面積は東京都よりも少し大きい2500～3000平方キロだが、雨季になると、メコン河の水がトンレサップ川を通して湖に逆流してくるため、その約3～6倍の1万～1万



トンレサップ湖（シェリムアップ州チョンクニアス集合村付近、3-3を参照）

6000平方キロにまで膨れ上がる。平均水位も乾季には1～2メートルであるのに対し、雨季には8～10メートルにまで上昇する。トンレサップ湖は、洪水期にはメコン河から水を飲み込み、渇水期にはその水を吐き出すという、いわば天然のポンプとしての役割を果たしている。

トンレサップ湖の周辺には、「氾濫原」と「浸水林」が広がっている。氾濫原とは、川によって流されてきた土砂が堆積し、毎年洪水によって必ず冠水する平地のことであり、浸水林とは、水没に耐えられる樹種の林のことだ。トンレサップ湖の浸水林は、アジアで最大の規模を誇るといわれている（ADB 2004a）。ここには、様々な種類の動植物が生息しており、トンレサップ湖の豊かな生態系を育む源泉となっている。例えば、浸水林では200種の植物、42種の爬虫類、225種の鳥類、そして46種の哺乳類が確認されている（前掲書）。

さらに、メコン河流域に生息しているといわれる淡水魚約1200種のうち200種以上が、トンレサップ湖で確認されている。日本ではサケのように海と川を回遊する魚は知られているが、メコン河では本・支流を魚が回遊している。下流で生まれ回遊する魚は、雨季のはじまりになると産卵のためにトンレサップ湖の浸水林を目指す。回遊しない魚も、浸水林で産卵し、繁殖する。浸水林ではプランクトンの増殖が盛んで、有機物も多く存在するため、魚が繁殖するには理想的な環境だからだ。トンレサップ湖からは毎年約23万トンの魚の水揚げ高があるが、これはカンボジアの内水面漁業（河川や湖沼での漁業）の総水揚げ高のおよそ半分にあたるという（前掲書）。世界的にも、淡水魚が最も豊富な湖として知られている。

このように、メコン河との水のやり取りにともなう大きな水位変化が、湖周辺に浸水林を含む氾濫原を形成し、豊かな自然の恵みを育んでいる。トンレサップ湖は、その水量調節機能からは「メコン河の肺」、また資源の宝庫としての重要性からは「カンボジアの心臓」とたとえられることが多い。トンレサップ湖がいかに貴重な存在であるかは、この2つのたとえからもよくわかる。

湖に頼って暮らす 人びとの生活

トンレサップ湖の湖岸には6つの州があり(巻頭の地図を参照)、州人口の総計約300万人がトンレサップ湖の天然資源に依存して暮らしている。とりわけ、トンレサップ湖とそのまわりの氾濫原には、約120万人の人びとが住む。さらに、そのうちの約4分の1にあたる34万人が、およそ170の村に分れて湖水に浮かぶ家に住んでいる。人びとは日々の暮らしの中で、トンレサップ湖から飲み水をはじめとするすべての生活用水を調達し、トンレサップ湖に生活排水を引き受けてもらう。湖上には商店や学校、病院などの公共施設もそなわっている。水上で暮らす人びとは、湖の水位に合わせて年に3~4回住居を移動する。雨季には、水位が10メートル近くまで上がるため湖岸に家を移動し、水位が1メートルほどの乾季になると、だんだんと湖の中心部に近づいていくのだ。



水上で暮らす人びと



トンレサップ湖水上の村。住居だけでなく、病院や学校などの公共施設もある。

トンレサップ湖に暮らす人びとのほとんどは、漁業を主な生計手段としている。その中には、氾濫原や浸水林を農地として開墾し、漁業のかたわら農業を行う人もいる。また、陸地に住み、雨季だけ湖までやってきて漁業をする人もいる。メコン河からトンレサップ湖へと回遊してくる魚がもっとも多い1月から3月の間には、陸地に住むたくさんの農民が、トンレサップ川沿いまでやってくる。その年にできた米ととれたばかりの魚とを交換するためだ。

カンボジアの人びとにとって、魚は動物性タンパク質摂取量の75%以上を占めるきわめて重要な栄養源となっている(FACT 2001)。特に、トンレサップ湖周辺に住む人びとは毎日の食事に魚が占める割合が高く、1人当たり平均年67キロを消費する(Ahmed et al. 1998 in Degen et al. 2000)。カンボジアは、世界中のどこの国よりも、人びとの日々の食料に魚の占める割合が高いといわれている。魚は生で食べるだけでなく、燻製や塩漬けなど、加工して食べる場合も多い。カンボジアの人びとは、豊富な魚をうまく利用しながら食文化を育んできた。その代表的なものに、「ブラホック」がある。ブラホックとは、トンレサップ湖やトンレサップ川などで大量にとれる小魚を塩漬けにした保存食であり、カンボジアの料理には調味料としても欠かせない。



小魚を塩漬けにした「ブラホック」



トンレサップ湖に住む人びとは生活の全てを湖の天然資源に依存している。野菜を売る住民。



とれた魚を洗う住民。魚は貴重な現金収入源にもなっている。

トンレサップ湖の住民にとっての魚の重要性は、それだけにとどまらない。生魚や加工品を売ることによって貴重な現金収入を得ており、生活必需品の購入費や薬代、学校の授業料、食糧不足の期間には米の購入費にも当てている。このように、漁業資源はカンボジアの人びと、特にトンレサップ湖の住民の生活に不可欠なものとなっている。

トンレサップ湖の豊かな水および漁業資源は、そこに住む人びとの日々の暮らしには、決して欠かすことのできない存在であり続けている。それゆえ、人びとは、微妙な生態系のバランスの上に成り立っている湖の変化に、とても影響を受けやすい生活を送っているのである。

第2章

変りゆく湖と人びとの暮らし

前章では、天然資源の宝庫であるトンレサップ湖が、そこで暮らす人びとにとって欠かせない存在である点を述べた。しかし、この20年余りの間に、湖の環境は荒廃してきており、資源の枯渇も進んでいる。その結果として、トンレサップ湖の天然資源に頼って暮らす人びとの生活も脅かされているのである。この章では、トンレサップ湖をかこむ6つの州のうち、コンポントム州、コンボンチュナン州、バットアンバン州、そしてポーサット州（巻頭の地図を参照）で聞き取った住民の声をもとに、湖の自然・社会環境にどのような変化が起きているのか、その原因は何なのかを探ってみたい。なお、トンレサップ湖周辺に「コンボン」の地名が多いのは、このことばがクメール語で「浜、船場」を意味するからであり、例えば、「コンポントム」は「大きな浜」の意味である。

汚れゆく湖の水と 水位の変動

私はずっとトンレサップの水を飲んで生きてきました。しかし、いまでは水の質が変わってしまっています。汚れた水を飲むことで健康を害することもあります。村の人びとも病気になっています。また、水をくみに行くたびに湖の水位が違うことに気づきます。雨季にはこれまでより高いし、乾季には低くなっているのです。トンレサップもだんだんと浅くなっています。トンレサップ川がゴミといっしょに泥を運んでくるからです。水上で生活する私たちの村も大変な影響を受けています。助けてほしいと思います。

ネック・リムさん

(コンボントム州コンボンスヴァイ郡コンボンチャムラン村在住)

トンレサップ湖に住む人びとにとって、湖の水は絶対に欠かすことのできない生活の一部であり、生命を育む源である。特に水上に住む多くの人びとは、湖の水を飲み、生活排水は湖へ戻す。人びとはそうやってずっと問題なく暮らしてきた。しかし、近年、これまでにない水質の悪化と水位の変化が、特に水上で生活を送る人びとを悩ませている。州ごとにその声を聞いてみることにしよう。



家のまわりにゴミがたまり、水質を悪化させている。

コンボントム州



トゥラン・キンホンさん

トールナンサウ村(郡名不明)に住むトゥラン・キンホンさん(50歳)は水上の家に住んでおり、4人の子供がいる。昔は漁業で生計を立てていたが、漁場の利用が有料になって漁に出かけることができなくなったため、漁業をやめた。今では湖上で小さな店を開いて生活している。

私は 水の上で生きています。農地はありません。乾季のおわりになると、トンレサップの水質が悪化します。いろんな種類の廃棄物が湖に捨てられていますし、船が通ると波が立ってますます汚くなります。雨季になって水位が上がるころには、にごって黄色くなった水が悪臭とともにやってきます。このにおいのあとには灰色の水が、そのあとには泥水が流れてきます。沈泥も多く、水かさが減っています。たくさんの人びとが病気になっていますが、私たちにはほかに水を得る手段がありません。最近は魚がとれなくなっており、村人の収入も減っています。その結果、私の店も繁盛していません。みんな、ついで品物を持っていきます。借金を抱えているのです。

健康を損ねると、住民の多くは借金をして病院代や薬代にあてる。もしくは、子ども-まずは女の子-に学校をやめさせて学費を節約する。病気と借金、その結果としての貧困が悪循環となって住民を苦しめている。ほとんどの人びとが湖の水を飲料水として使用するため、下痢になる人が多いという。アジア開発銀行^{※2}によれば、トンレサップ湖周辺ではマラリア、デング熱、急性呼吸器感染症、結核などの疾病も蔓延している(ADB 2004a)。



オーン・ナットさん

コンボンスヴァイ郡のコンボンチャムラン村に住むオーン・ナットさんは、38歳。7人の子供がいる。オーン・ナットさんも15年前から水上家屋に住み、漁業のみに頼って暮らしているが、同じように水質の悪化を訴える。

毎日使う水は、容器を持って行って家のちかくでくみます。たまに、湖から直接飲んだりもします。私の家のちかくでは、水上の家々から投げ込まれるゴミ、便所の排水、農薬、養殖場から出るゴミ、そしておそらく上流にある州都コンボントムから流れ込む廃棄物によって、水が汚れています。しかし、人びとはこれまでどおり、毎日この水を使っているため、ときどき病気にかかってしまいます。また、以前に比べて湖が浅くなっています。上流から流れてくる泥が村の近くを通るトンレサップ川を埋め立て、水を汚します。毎年堆積物の高さが増していることも気になります。

※2 アジア開発銀行(ADB)は、「アジア・太平洋地域における開発プロジェクトを資金面から援助する」ことを目的に1966年に設立された多国間開発銀行で、本部はフィリピンのマニラにある。カンボジアも設立当初よりの加盟国。詳しくは、www.adb.orgを参照。



小さな子ども、特に女の子が学校へ行かずに漁を手伝う。



魚をとる住民。年々とれる魚が減っている。



水位の低い湖



チャン・ブントゥーンさん

トンレサップ川がトンレサップ湖に出合う地点に位置するコンポンチュナン州では、住民が深刻な水質悪化を訴えている。昔から水運の要衝として栄え、漁港があるコンポンチュナン州は、湖の中でもっとも魚がとれる場所であり、魚をブノンペンやタイなどへ輸送するための集積所でもある。

ポリボ郡チュノック・トゥル村で水上家屋に住むチャン・ブントゥーンさん(51歳)には、5人の子どもがいる。一家は12年以上ここに暮らしている。

私は水の上で食べ、水の上で寝て、湖で水浴びをします。飲み水も、トンレサップの水です。水は沸かして飲みます。付近には小さな工場がたくさんありますが、汚染を防ぐ規制はありません。工場からは油や廃棄物が湖に流れ込みます。村に流れてくる水は油のにおいがしますし、魚を加工した後の残骸もまじっています。また、商業活動も活発で、大型船が行ったり来たりして水を汚しています。汚い水を飲むので下痢などの症状も出ていますが、水問題についての関心は高くありません。



セム・プレアンさん

同じ村で、やはり水上家屋に住むセム・プレアンさん(48歳)も、次のように話す。

私の家の近所でも水の汚染がひどくなるばかりです。農薬や石油、水上家屋や養殖場がたれ流す廃水、そして上流から流れてくる廃棄物が原因です。それなのに、このあたりの人びとはこれまでどおり湖の水を飲んでいるため、下痢をおこします。また、トンレサップ川がむかしよりも浅くなっています。湖がなくなってしまうのではないかと心配です。

規制のない工場から出る廃水がトンレサップ湖の汚染源となっていることは明らかである。また、経済活動が活発になるにつれて、魚の養殖場から流れ込む廃水や、大小の船舶から漏れる燃料、急激な人口増加にともなう増大する生活排水なども汚染の原因である。このほかにも、首都ブノンペンや、アンコール遺跡群を擁する観光地として賑わうシェムリアップ市からも、生活排水や工場廃水がトンレサップ湖に流れ込んでいるという。

魚の加工場からの廃水も湖の水を汚染する。



サット・サロムさん

農薬の影響も心配である。これも同じチュノック・トゥル村で農業を営むサット・サロムさん(43歳)の声であるが、サット・サロムさんは、トンレサップ湖に2ヘクタール(2万平方メートル)の小島を持ち、そこで作物を栽培している。しかし、農作物はなかなか売れない。安価な「輸入もの」に太刀打ちできないのだ。そこで、収穫をあげるために農薬を使っている。農薬に対する警戒心がない点が気になるところである。

スイカをつくるのに3種類の農薬を使います。使わないと収穫があがりません。農薬の扱いかたは業者から聞きました。もう12年間も使っています。農薬は手で混ぜて、週に2回撒いています。子どもも手伝ってくれます。雨季になると(農薬を散布した)この小島は完全に水没しますが、悪影響はないと思います。

実際、トンレサップ湖周辺では農薬による水質汚染が目立ち始めている。地元の研究者によると、湖周辺で農薬の使用量が毎年増えており、2000年には、日本でも使用が禁止されているDDT(防疫・殺虫剤の一種)やメチルパラチオン(有機系殺虫剤)など、非常に危険な農薬が130万リットルも消費された。メコン河下流域で標本抽出された魚からは、いたるところで残留農薬が検出されたという。特に、商業価値の高いナマス種に多かった(Koma et al. 2001 in FACT 2001)。さらに、乾季に使用する化学肥料のせいで、湖や川では一時的な富栄養化が起きて魚が死んでいる。農薬や化学肥料がトンレサップ湖の水を飲み水としている人びとの健康に与える被害についてはまったくわかっていない。しかし、このままでは、将来深刻な事態をまねくことは間違いないだろう。

サット・サロムさんは、トンレサップ湖の「肺」としての機能が衰え、農業に影響が現れている点についてことばを足した。

ちかごろは、乾季に水の引くのがおそいうえ、雨季には突然水位が上がリ、作物に被害が出ています。むかしは、雨季でもいつ水位が上がるかわかっていましたので、それに合わせて作付けをしていました。しかし、この知恵はもう使いものにならなくなっています。

大規模な船舶の航行や船からの油漏れが水を汚染している。



湖岸にたまっていく廃棄物



トンレサップ湖では農薬の使用量が年々増えている。



氾濫原における農業



クイ・ヴォボルさん

バタンバン州エクブノム郡のアンロン・タオウー村に住むクイ・ヴォボルさん(32歳)も、同じように、水位の変動を口にした。クイ・ヴォボルさんは、トンレサップ湖に流れ込むサンケー川沿いの水上家屋で7人の家族とともに暮らしている。

水は私の家族にとって命です。朝起きて、川の水で洗顔をすませ、川の水で野菜を洗います。一日の活動のすべてを水の上で行います。町へも船で行きますし、ほかに方法はありません。夫が魚をとりいき、私は夫がとった魚を加工して行商に歩いたりします。トンレサップでは、水位変動のサイクルがおかしくなっています。これまでは空の様子を見て、いつか漁業にいい時期かを見きわめていました。いまは湖の水位の変動がはげしいため、空の様子はあてにならなくなりました。たとえ空模様が漁業にいい時期を教えてくれたとしても、もう湖に魚がいないのです。水も汚れています。雨季になると、湖に水が流れ込んできますが、ゴミがいっしょです。雨季は本当に水が汚いのです。この状態は水の流入が終わる時期まで続きます。そして、そのあとで少しましになります。10月になって、漁業シーズンが始まるころ水は濁りはじめ、いまも、とても汚れています。村のまわりでは水が黒く濁っています。



チツヴさん

同じ村の水上家屋で生まれ、ずっと湖で魚をとりながら暮らしてきたチツヴさん(44歳)も言う。

乾季ではいままでよりも、水の引きがゆっくりしています。いつもより水量が多いので、水位が高すぎて、私の使う伝統的漁具では魚をとることができません。ゴミもたまるようになってきています。一方で、雨季にはいつもより早くメコン河から水が入ってきます。このような現象が起きるようになったのは数年前からです。



年々汚れゆくサンケー川



ソル・レットさん

同じ村に住むソル・レットさん(56歳)は、水が運ぶ土の問題を指摘する。そこには、メコン河上流で進む大規模開発の影響も影を落としている。

私たちの生活は水と川に依存しています。川の水が上流から、肥沃な土を運んできてくれます。農作物にはとてもよいのです。しかし、いまでは流れてくる土が多すぎます。このままだと、トンレサップや魚、そして私たちの生活はどうなってしまうのでしょうか。湖の環境はむかしと比べて明らかにちがいます。子どもたちの世代のことが心配です。ここに住む者たちには、環境が変わっても、いままでのようにして暮らしていく以外生きる術がないからです。メコン河の上流にダムが建設されて自然がおびやかされていると聞きました。川がおかしくなるのもあたりまえです。人間は賢いとは思いますが、自然は私たち以上に賢いのです。

コンポントム、コンボンチュナン、バタンバン以外の州に住む人びとからも、年ごとに増水と渇水をくりかえす川のサイクルに変化が生じ、堆積物が増えている、と訴える声があがっている。メコン河委員会^{※3}が最近行った調査でも、雨季にトンレサップ川からトンレサップ湖へ運び込まれる大量の堆積物に対する懸念が示されている。この調査によれば、堆積物のほとんどは、湖ではなく、浸水林や農地のある氾濫原に集まっているという(WUP-FIN 2003 in Experience and Lessons Learned Brief for Tonle Sap 2004)。氾濫原は住民が多く暮らす場所だ。住民からトンレサップ湖が浅くなっているという声が聞こえてくるのは、このためかもしれない。

こうした変化の原因はメコン河上流域での森林伐採ではないか、と指摘する研究者やNGOも多い。例えば、国際的なNGOのネットワークによれば、メコン河流域にもともとあった森林の69%がすでに失われている(Lakenet 2004)。60年に1度といわれた2000年のメコン河大洪水では、カンボジアでも400人近い人びとが死亡しているが、年間降水量にかぎっては例年並だったという(松本 2004)。メコン河集水域の過剰な森林伐採によって、森林に保水力がなくなっているのではないかと、それが水位の変動や堆積物の増加をもたらしているのではないかと、現地のNGOは懸念している。トンレサップ湖の漁業や生態系への影響はいまだに詳しくは調査されていないが、今後激化する可能性もあるだろう。



ロン・ポインさん

バタンバン州に戻ろう。ここでは、生活排水や工場廃水による汚染という他の州でも見られる問題に加えて、人口増加がトンレサップ湖にもたらす影響についても聞くことができた。エクブノム郡コッ・チヴァイン村のロン・ポインさんは、家族3人で水上家屋に住んでいる。雨季になると水位が上がって村が水浸しになるため、家を移動する生活を送っている。

汚れた水が上流から流れてきます。鉱石の採掘が行われているからです。乾季の水質汚染はますますひどくなっています。村の人口は2倍に膨れ上がっています。一方、魚がむかしに比べて少なくなっています。「サムラ」という漁具を仕かける人がいて、これをやると水が汚れ、悪臭を放っています。

※3 メコン河委員会(MRC)とは、メコン河の開発と保全と利用に関わる調整を行うための国際機関。本部はラオスのビエンチャン。現在、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムのメコン河下流域4カ国が正式加盟しており、残る流域国の中国とビルマ(ミャンマー)はオブザーバー参加にとどまっている。詳しくは、www.mrcmekong.orgを参照。

バタンバン州では、ルビーなどの鉱石を採掘する鉱山が、掘り起こした粘土を川に捨てており、これがトンレサップ湖を汚染する原因のひとつとなっている。また、鉱山の表土も洗われ、サンケー川を通して湖に流れ込むため、水深が影響を受けている。これも、住民が川底や湖が浅くなっていると感じる理由だろう。

また、ロン・ポインさんと同じ村に住む人たちも、ここ数年で村の人口が倍以上に増えた口をそろえる。漁業への新規参加者が増えていることで、1回あたりにとれる魚の量が減っている。そのため、多くの人びとが漁獲量を増やそうと、禁止されている「サムラ」を使う。サムラとは、木の枝を束ねて作る漁具の一種で、魚の休息場所あるいは産卵場所を擬似的に再現する(2-3 囲み「違法漁業」を参照)。サムラを水中に設置すると、そこにゴミを含んだ堆積物が集まり、水を汚染する。



違法漁具の「サムラ」。枝を束ねて魚の休息・産卵場所を擬似的に再現する。



マオ・ヴァンナさん

バタンバン州の隣に位置するポーサット州でも、住民は同じように工場廃水とサムラの被害を訴えている。クラコー郡アンロン・ライン村に住むマオ・ヴァンナさん(45歳)は、15年以上もトンレサップ湖の上で暮らしているが、特にサムラの問題点を指摘する。

コンボンルオン

の小さな工場や便所から出る廃棄物でトンレサップの水が汚れています。村ではサムラによる被害も見られます。サムラを仕かける人たちの背後には地元の有力者がいるのです。乾季には水が特に汚れます。それでも、私たちが水を得られる場所はほかにはありません。私は薬を水に入れて、水を透明にして飲んでいます。



ヴァイン・ポウさん

同じポーサット州クラコー郡のコンボンブラック村では、こちらも15年以上にわたって家族9人で水上の家に住んでいるヴァイン・ポウさん(42歳)が、他の州の村人と同じように水質悪化の被害を訴えた。

私は トンレサップの水を飲んでいます。村の多くの人びとは、沸かさずに飲んでます。乾季の水は牛乳のように濁っていて、悪臭がします。人口が集中しているコンボンルオンの廃棄物が流れてくるからです。この水を飲んで、病気になるしました。製氷工場も廃水を流しますし、モーター・ボートが往来して水をかきまわします。サムラを仕かけるのも水質汚染の原因です。



製氷工場の廃水も水質を悪化させる。

トンレサップ湖の住民たちは、これまでずっと、湖の水を生活全般に必要な目的のために利用してきた。今回話を聞いた村人たちは、その湖の水質が、近年悪化しているとの実感を抱いているのである。水質悪化は、場所によって多少の違いがあるものの、共通した原因を特定することができる。すなわち、湖の周りの工場や鉱山の操業、町が出す廃水、大小の船の航行にともなう石油漏れ、農薬の使用、人口増加による生活排水の増加、そしてある種の漁具を使用する際の影響などである。フィンランド政府の支援で行われた最近の調査では、トンレサップ湖の水質は、湖全体で見ればそれほど悪化していないという。しかし、水上の村とその周辺で水質悪化が問題となっていることが確認されている(Experience and Lessons Learned Brief for Tonle Sap 2004)。

また、水位の変動や堆積物の増加については、森林伐採のほかにも、ダム建設など、メコン河本・支流の開発が影響している可能性がある。1950年代からメコン河流域には、おおよそ6000もの大規模・小規模ダム、堰、貯水池、灌漑施設がつくられた。これらの構造物がメコン河にもたらす累積的な影響によって川の水文が変化してきていると考えられる。カンボジアでは、そうした影響をもっとも受けるのがトンレサップ湖である。にもかかわらず、流域ではあいかかわらずダム建設が盛んで、例えば、ラオス政府は、2010年までに累計で23のメコン河支流ダムを完成する計画を立ててお

り、中国政府にいたっては、これまで誰も手をつけなかったメコン河本流に14のダム・貯水池の建設を計画、そのうち3つの建設をすでに終えている。アジア開発銀行やメコン河委員会ですら、中国政府による本流ダム開発がカンボジアの環境にもたらす影響の大きさを懸念している(Sheridan 2001 in FACT 2001、メコン・ウォッチ 2005)。中国政府はダム建設以外にも、メコン河の早瀬や岩礁を爆破・除去することで、中国-ラオス間約886キロを航路として整備し、大型商業船舶の航行を可能にしようとしている。メコン河本・支流でのこういった乱開発によって、「メコン河の肺」と呼ばれるトンレサップ湖が、今後も大きな影響を受けることは想像に難くない。

今回話を聞いた人びとの多くは、これからもずっとトンレサップ湖で生活していけるのかどうかをとても心配している。とりわけ、子どもたちの世代がどうなってしまうのかと心を痛めているのである。



水上の家。将来も今のように湖で暮らしていけるのかと住民は心配している。



家のまわりにたまるゴミ。人口が増えることで、生活排水やゴミが増加している。

破壊される浸水林

浸水林は、10年前に比べてあきらかに減っています。陸上で生活する人たちがやって来ては浸水林を伐採して農地にしていきます。たくさんの人が薪に使ったり、売るために浸水林を切ります。動物を捕まえる目的もあります。木がなくなって、浸食がはげしくなりました。

マオ・ヴァンナさん
(ポーサット州クラコー郡アンロン・ライン村在住、2-1を参照)

トンレサップ湖周辺の住民にとって、水と同じくらい欠かせない命の源が、湖の周りに広がる氾濫原と浸水林(1-1を参照)である。たくさん生きものの繁殖・生息地となっているだけでなく、家を建てる際の建築材、魚の仕掛けを作る材料、燃料にする薪、薬草、果物、野菜など、生活に必要なあらゆるものが浸水林によってもたらされる。こうした森林資源をとる一方で、資本投下が必要ばかりか、所有権も求められない。そのため、浸水林がもたらす恩恵の度合いは、特に貧困層の生活にとって大きく、漁業がうまくいかない時のセーフティ・ネットにもなっている。また、浸水林は、浸食や洪水の影響を緩和するなど、生態系の公益的機能も持ち合わせている。住民は、浸水林と接する際、実用的価値だけにとどまらず、文化的・精神的価値も見出してきた。浸水林は欠かすことのできないものであり、湖で暮らす人びとはずっとその豊かな恵みにあずかり命をつないできたのだ。ここでも、トンレサップ湖周辺の州をめぐるながら、浸水林に関する地元の人びとの声に耳をかたむけてみよう。



トンレサップ湖辺には23万9000ヘクタール(2390平方キロ)にわたり浸水林が広がっている。

バタンバン州



セック・サヴンさん

バタンバン州エクブノム郡コッ・チヴァイン村に住むセック・サヴンさん(26歳)が、まず、浸水林の減少について語ってくれた。

わが家のまわりの浸水林も少なくなっていました。私は薪にするだけで少ししか木を切りませんが、野生動物を捕まえる目的で森を切り開く人たちがいます。漁業区(2-3を参照)の所有者が、木の柵でできた仕掛けを設置するために、浸水林を切り開いているのを見たことがあります。貧しい私たちが生きていけるように、政府にはきちんと天然資源を守ってほしいと思います。

同じ村に住むトゥアン・ペットさん(29歳)も同様の被害を口にした。

浸水林は、魚にとってとても大事だと聞きました。生息地となっているからです。でも、その浸水林がだんだんと減っていています。私たち地元の間が破壊しているという人もいますが、私たちは少しの木しか切りませんが、地元の有력者たちが大量に伐採し、川を渡して大型トラックで州都バタンバンまで運んでいます。こういう有力者たちは兵士や役人に守られているのです。私たちがそんなことをすれば、絶対に逮捕されてしまうのに。



浸水林で伐採された大量の丸太



浸水林のまわりでは魚が多くとれるため、漁業のための仕掛けが多い。



木の柵でできた仕掛け。このためにたくさん木が浸水林で伐採されている。



オーン・ナットさん

先に水質の悪化について話してくれたコンポンスヴァイ郡コンポムチャムラン村在住のオーン・ナットさん(2-1を参照)は、浸水林の変化についても次のように教えてくれた。

むかしにくらべて、浸水林が減っています。外から人がやってきて、薪にするために木々を切っていきます。農地を開拓したり、野生動物を捕まえるために浸水林を切り開く人もいます。ほとんど、州都コンポントムから来た人たちです。



モック・ポンさん

コンポンチュナン州ポリボ郡チュノッ・トゥル村に住むモック・ポンさん(47歳)は、漁業だけでは暮らせないために農業も行っている。浸水林を切り開く貧農の苦悩をこう語っている。

収入の足しにするために、農業をしています。1ヘクタール(1万平方メートル)の農地を持っています。このへんは、かつて浸水林が生い茂っていましたが、農地するために伐採しました。いまでは伐採は違法ですが、それでもたくさんの浸水林が農地開拓のために伐採されています。漁業と農業の両方をやるには労働力が足りないの、子どもたちに手伝わせています。まへは4人の子どもたちがみんな学校へ行っていました、やめさせてしまいました。そうやって働いてもまだ貧しいのです。

浸水林には草むらや低木(写真右)が多い。

トンレサップ湖では、1960年代の時点ですでに広範囲にわたる浸水林が農地に転換されており、その後のポル・ポト政権下(1975~1979年)では、大部分が焼畑農業に利用された。ポル・ポト政権が崩壊した1979年以降も、浸水林は伐採され続けている。つまり、現在の浸水林の多くは二次林だといえる。高い樹木よりも灌木の方が早く再生するので、浸水林に低木や草むらを見ることが多いのはそのためである。

アジア開発銀行によると、もともと100万ヘクタール(1万平方キロ)あったトンレサップ湖の浸水林が、1960年代には61万5000ヘクタール(6150平方キロ)に、1991年には36万2000ヘクタール(3620平方キロ)に減少し、今では23万9000ヘクタール(2390平方キロ)にまで落ち込んでいる(ADB 2004b)。今後も浸水林は、カンボジア全体の森林伐採の速度に歩調を合わせて、年0.5%の割合で減り続けていくとのことである(Keskinen 2003)。

浸水林の伐採が進む背景はさまざまだが、農地開墾が主な原因だといわれている(MacKenney et al. 2002 in Keskinen 2003)。最近の調査で、氾濫原の23%、およそ35万ヘクタール(3500平方キロ)が耕作地として使われていることがわかっている。湖外からの移住と自然増を含めた近年の人口増加の結果として、土地なし住民の多くが浸水林を伐採して農地に転換し、生活手段を確保している。特に、トンレサップ湖の魚が減少して食料も現金収入も減ってきている昨今では、貧困層の住民がこれまで以上に浸水林に依存していると予想される。たくさんの枝を必要とするサムラの作成(2-1を参照)や、家屋の建築のためにも、多くの木々が伐採されていく。

農村に住む人びとは毎年500万トンの薪と8000トンの炭を使用する。カンボジアではエネルギー消費量の大部分が薪と炭でまかなわれているため、今後も人口増加にともない、薪の需要はさらに増加すると予測されている(ADB 2000 in FACT 2001)。トンレサップ湖の浸水林は薪炭の供給源でもある。商業伐採もさかんだ。フィンランドの研究機関が行っている「トンレサップ・モデリング・プロジェクト(WUP-FIN)」の調査によれば、1回あたりもっとも多くの薪を消費するのは、レンガ焼き釜作りと魚の燻製加工である(Keskinen 2003)。

さらに、野生生物の密漁も浸水林を脅かしている。1999年4月に東南アジア諸国連合(ASEAN)に正式加盟したカンボジアは、他のASEAN加盟国に追いつこうと経済活動を活性化させている。その影響は、天然資源管理にも及んでおり、大量の熱帯林、保護野生動物がタイ、ベトナム、中国、香港、シンガポールなどへ輸出されている。トンレサップ湖においては、割の良い現金収入源となるワニやヘビ、カメなどの野生生物の密漁が盛んで、捕獲のための火入れも浸水林を破壊している。

このように、人口増加にともなう農地の需要、薪炭や建築材の調達、そして稀少野生生物を捕獲するための火入れなどさまざまな要因が、トンレサップ湖の浸水林の荒廃をもたらしているのである。



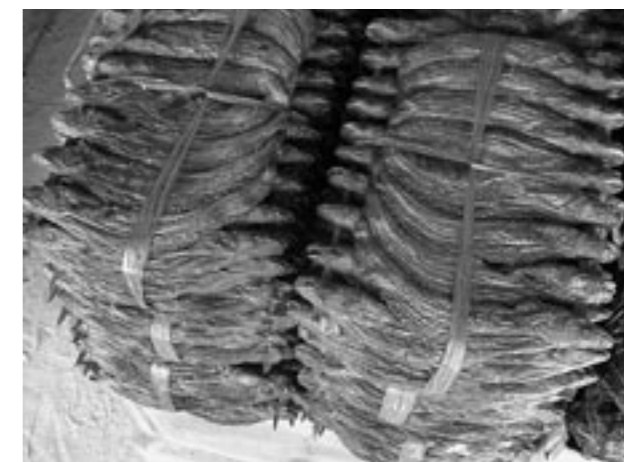
現金収入となるカメをとるために浸水林が伐採される。

この項を、先にメコン河上流での大規模開発への懸念を訴えていた、バタンバン州エクブノム郡アンロン・タオウー村のソル・レットさん(2-1を参照)の静かな声で結ぶことにしよう。

私たちはトンレサップの自然に頼って生きてきました。今では、森林伐採のために、このあたりの自然がだんだんと破壊されてきています。零細漁民が自分で使うために木を切っていることも知っています。でも、貧しい者たちを非難してはいけないと思うのです。貧しい人びとは生きるために木を切るのです。ところが、金持ちはもっと金持ちになるために木を切る。金持ちと、私たちのような貧しい人間とではそこがちがうのです。



浸水林を伐採する住民



魚の燻製加工のためにたくさんの薪が使用される。

魚の減少と 漁業をめぐる衝突

家族総出で魚をとりに出ますが、伝統的な漁法ではもう魚がとれません。陸地から人がたくさんやってくるので、漁場は手狭になっています。大規模な漁業をする人とはもめごとが起こります。違法にたくさんの魚をとってしまうからです。こうなると、私たちも禁じられている漁法を使わないと魚がとれません。そんなことはしたくはありませんが、そうしないと生きていけないのです。質の良い魚は売ってお金にかえて、質の悪い魚を自分たちで食べます。魚がいなくなったら、いったい何を食べて生きていけばよいのでしょうか。

リン・スレイ・ヴンさん
(26歳、ポーサット州クロコー郡コンボルアン村在住)

魚と漁業は、トンレサップ湖に住む人びとにとって生命線ともいえる。魚は重要なタンパク源であり、さまざまな形で生活を支えてくれる大事な収入源でもあるのだ。特に、土地を持たない人びとにとっては、その傾向が顕著だ。魚が手に入らなければ、住民の健康や生活が決定的な影響を受ける。しかし今、水質の悪化や浸水林の減少にくわえて、魚をめぐるも危機が迫っている。トンレサップ湖に住む人びとから、口々に「魚が減少している」という声を聞いた。



トンレサップ湖では大きな魚がとれなくなってきている。

コンポントム州



マン・サットさん

コンボンスヴァイ郡ネアンサウ村に住むマン・サットさん(62歳)は、15歳の時からずっと魚をとって暮らしている。

私にとって、魚は生活のすべてです。漁場は、農民にとっての水田と同じで、農民が水田で米をとるように、私たちも漁場で魚をとるのです。魚を食べれば健康でいられますし、魚を売って薬を買うこともできます。子どもたちの学費もそうやって支払います。

マンサットさんは、全長3メートル、直径1.4メートルの仕掛けを持っている。仕掛けは、150～200メートルの竹の垣根につながっている。これまでのやり方では、もはや十分な魚がとれないことが悩みである。

むかしに比べて、魚が減っています。私たちの世代が魚をとりすぎているのです。村の子どもたちには何が残るのでしょうか。いまの子どもたちが大きくなったら、私たちの世代の無神経なやり方をとがめることでしょう。トンレサップでの違法漁業のために、これまでの漁獲量がその6割から7割も落ち込んでいます。漁業人口の増加と環境の変化も原因でしょう。魚の中には、最近ほとんど見かけない種類もあります。将来は絶滅してしまうかもしれません。

漁業を続けるためには、漁場代と大規模な漁具の使用料を払わなくてはなりません。魚が減ってからというものの、伝統的な漁具では生活に十分なだけの魚がとれないのです。そのため、魚の仲買人に借金をして、魚がとれたらその仲買人に売らなければなりません。とても公平な価格がついているとは思えません。いまは、借



ホー・ティエムさん

金を返すためだけに魚をとっていますが、それでも借金はなくなりません。

コンボンチャムラン村の水上家屋に20年以上住んでいるホー・ティエムさん(60歳)も、同じ悩みを抱えている。違法漁業を行う人びとが増えているが、それは、伝統的な漁法では十分に魚がとれなくなったからだとする。

私たちが魚をとる場所に、陸上で生活する人びとも魚をとりにやってくるため、漁場が手狭になっています。また、近辺の人口も2倍に膨れ上がっています。大規模漁業と零細漁業の間の衝突や、陸からやってくる人々と水上でもともと暮らしていた私たちの間で魚をめぐる争いが起きています。漁獲量はまえに比べてどんどん減っていて、とれる魚もどんどん小さくなっています。魚の中には姿を見なくなった種類もあります。陸上で生活をする人たちは、稲作と漁業の両方ができるため、豊かです。でも、水上で生活する私たちには漁業がすべてなのです。食糧、衣服、学費、薬、漁具など、生活のすべてを漁業に頼っています。

違法漁業を行う人が増えています。電気ショックや薬品、モーター・ボートやポンプを使って魚をとるのです(囲み「違法漁業」を参照)。私たちがとれる魚の量はま

えに比べて減りました。伝統的な漁法では、魚だけで生計を立てている私たちの生活を支えることができなくなっています。まえよりも多くの家族で、より長時間漁をしますが、それでも魚はあまりとれません。魚がとれたら、質の良いものは売って、悪いものを家族で食べます。現金収入が必要だからです。

本章の冒頭部分で水質汚染について語ってくれたコンボンチャムラン村のネック・リムさん(2-1を参照)は、苦しい生活と子どもたちの将来に対する不安を次のように表現した。

私は小さな船と、「刺し網」という漁具を持っています(囲み「違法漁業」を参照)。日々の暮らしを支えるためだけに魚をとっています。漁が最高潮に達する満月の日には、1日50～60キロの「トゥライ・リエル」(小さな魚)がとれます。半月のときは1日3～5キロです。満月の日は夜に漁に出ます。乾季にはトンレサップで、雨季には湖の外側で漁をします。魚が浸水林にいるからです。でも、魚は減りつづけています。増えたことは一度もありません。米を10キロ買うために3日間は漁に出なければなりません。漁具は、仲買人に借りているため、とれた魚は同じ仲買人に売らなければなりません。ほかの仲買人に魚を売れば、漁具を取り上げられてしまいます。妻も子どもたちも、みんな漁に出ます。子どもたちが学校に行けないのは、漁で忙しいからです。でも、もうこのまま漁業を続けてはいけなと思っています。借金が返せないのです。トンレサップの魚に何かが起きているのではないかと不安です。将来子どもたちの食べるものがあるか。いまはそれが一番心配です。



魚をとりに出かける住民

先に農業について話を聞かせてくれた、ポリボ郡チュノッ・トゥル村在住のモック・ボンさん(7人家族、2-2を参照)は、水上家屋に住み、漁業も営みながら生活している。毎年水位に合わせて家の場所を3~4回変えると言う。違法漁業とて解決策にはならない。漁具を買うお金や、役人に渡す賄賂が要るからだ。

いまのままだと、漁業だけでは暮らしていけません。もし漁業を続けるならば、もっと大きな漁具が必要です。小さい漁具のままでは、魚がとれません。このへんでは、網を3隻のモーター・ボートで引っ張る大規模漁業が頻繁に行われています。稚魚をとり尽して、魚の生息地を破壊します。私があのように魚をとろうとすれば、漁具にもっとお金をかけなくてはなりませんし、役人にお金も払わなくてはなりません。そんなお金はありません!だから、いまのままでも暮らさざるを得ないのです。大規模な漁業がこのまま続けば、トンレサップに魚がいなくなってしまうのです。トンレサップの魚を守ってほしい。それは、私たち貧しい人間を守ることになるのです。



水上の家

クイ・ヴォボルさんは32歳。家族7人でエクプノム郡アンロン・タオール村に暮らしている(2-1を参照)。水の上で生まれ、水の上で生きてきた。漁業を生業にしている。

夫が魚をとりに行きます。まえよりも魚をとる人が増えています。陸から人がやってくるので、競争や衝突が起きています。以前と比べて夫がとる魚の量が減っているのが心配です。ほとんど、トゥライ・リエルしかとれません。大きな魚はどこへ行ってしまうのでしょうか。でも、米を買うためには魚をとらなければならないのです。毎日とって、毎日売って。生きるためにだけやっています。もっと魚をとるには、大きな漁具を買い、役人に料金を払わなければなりません。むかしは1日4~5キロの魚がとれました。いまでは、1キロとるにも苦労します。家族が多いので、毎日とれる以上の魚を食べてしまいます。



違法漁業。細かい網目のネットで小さい魚までとってしまう。



トゥアン・ペットさん

エクプノム郡の水上家屋に住むトゥアン・ペットさんは、すでに浸水林の減少について語ってくれた(2-2を参照)が、ここでは、違法漁業が起こる背景について説明してくれる。トゥアン・ペットさんの家は、トンレサップ湖に流れ込むサンケー川沿いにある。水位に合わせて家の位置を変えている。家の床に使われている竹は、常時水に接しているため腐食する。そのため、2~3年毎に交換している。違法漁業が蔓延するのは、「違法」とすることで、取り締まる立場にある役人が賄賂をせびることができからでもある。しかし、トゥアン・ペットさんにはそんな金はない。

私が心配するのは、日々の生活のことだけです。1回の漁でとれる魚の数が減りました。このあたりにある漁業区の管理者が電気漁具を使うのです(囲み「違法漁業」を参照)。また、目の細かい網を使うため、稚魚も捕まえてしまいます。このようなめちゃくちやな漁のやり方はまちがっているとわかっていますが、誰も止めることができません。私が違法な漁をすると逮捕されませんが、漁業区の所有者は絶対に逮捕されません。賄賂を渡しているからです。漁場は汚職だらけです。私には違法漁業をやるだけのお金はありません。将来の世代の暮らしはどうなるのでしょうか。



ヴィン・ボウさんは42歳。9人家族でクラコー郡コンボンブラック村の水上の家で暮らしている(2-1を参照)。ここでも問題は、魚を争って取り合うために起こる衝突である。少しでも魚をとろうとするとところに役人のつけこむ隙がある。

コンボンルオン

から人がたくさんやってきて、違法な漁業をやります。私たちの村にあてがわれている漁場に無断で入り、近代的で大きな漁具を使って魚をとります。そのため、私たちのような零細漁民との間で衝突が起こります。ところが、私たちの漁具が壊されてしまっても、政府は仲裁に入ってくれません。だいたい、伝統的な漁法では、もう対応できません。競争の中では生き残れないからです。しかし、「漁業法にはいまだに伝統漁法を行うように書いてある」と役人は言います。そう言えば零細漁民が違法漁業を見逃してもらおうと役人に賄賂を差し出すので、役人はわざとこの法律を変えないでいるのです。



ソック・ケオさん

同じコンボンブラック村に住む7人家族のソック・ケオさん(30歳)も、同様の問題に直面している。

年々、とれる魚の量が減っています。村の中ではいろいろと分け合っていますが、外部の人たちとのいざこざがはげしくなっています。私たちの漁場に、よその人たちが入ってくるのです。その人たちは漁業法では禁止されている漁具や漁法で漁をします。どんな制度があっても、違法漁業を撲滅することはできないと思います。規制しても、また行われるのですから。漁業法がなぜいまのままなのか理解できません。だって、いまのままでは自給すら難しいからです。死んでしまうからです。空腹なのに、伝統的な漁業を続ける人がいるわけがありません。する賢い役人は、この法律をかざして人びとから金を巻き上げます。拒否すると逮捕されるので、住民は怖がってお金を払います。



違法漁業でとった魚を運ぶ人びと

とれる魚が減っているため、いまでは妻も子どもも、家族全員で魚をとりに出かけます。子どもたちが教育を受けられないのもそのためです。それでも十分な量はとれないので、わが家は貧しいままです。

住民の多くが指摘するトンレサップ湖の漁獲高の減少は、統計上の数字では確かめられていない。魚を種別に見た詳細な調査などが行われたことはないからだ。実際のところ、トンレサップ湖の現在の水揚げ高は、史上最高だろうともいわれている。「漁獲努力量」(漁船の数や漁具、漁法など、魚をとるために投入される労力を積算した概念)がこれまでよりもずっと多くなっているためである。一方で、繁殖までに1年以上を要する魚種をはじめ、メコン大ナマズなどの大型魚や、中型で高い値のつく魚の数は明らかに減ってきている。そのため、住民が証言しているように、1回にとれる魚の量が減少してきている。1回の漁では大型や中型の魚はとれず、1年周期で繁殖し、より回復力のある小型の回遊魚がより多くとれるからだ。つまり、トンレサップ湖に生息する魚の多様性と回復力が失われつつあると言える。もっとも大きな原因は、住民の声にもあるように、トンレサップ湖での漁業の管理方法が結果的に違法漁業や乱獲を助長しているからだろう。

カンボジアの内水面漁業は、漁業区による「商業漁業」と、オープンアクセスによる「自給的漁業」との間で競合状態にある。商業漁業と自給的漁業とは、漁の時期や範囲、使用可能な漁具の種類などが別々の基準で定められている。ただし、現在の漁業管理の主な関心は持続可能な資源管理よりも収益におかれているため、こうした基準はすべて大規模な漁業区での活動、すなわち商業漁業を優先して設定されている。

このような漁業区制度は、1900年代初頭のフランス保護領時代に導入された。その後、ポル・ポト政権時代の空白期間があったが、1980年代末の深刻な財政難を解消するために当時の政府によって、再導入された。現時点にいたるまで、実施体制は整備されていない。

例えば、大規模漁業の場合、「入札」といっても不正が横行しており、地元の役人や政治家、軍人や商人などと結託した有力者が落札するケースが多い。1997年に政府が漁業区から得た収入は、年間200万ドル（約2億円）と推定されている。大仕掛けの漁をする人びとはベトナム系住民に多い。1989年に駐留ベトナム兵がカンボジアから撤退して以来、カンボジア・ベトナム住民は治安当局の手厚い庇護を必要とすることになる。ところが、そこに付けた軍や警察などが「治安維持」という名目でベトナム系住民につきまとい、賄賂をせびってきた（柳 2004）。その結果、時には違法漁業を見逃がすという構造ができあがっている。違法漁業の最大の「立役者」が軍や警察だといわれるゆえんである。

漁業区の管理の問題に目を向けると、1人の管理者が漁業を効果的に行うには漁業区が広すぎ、また、入札にかかった費用を取り戻すために、管理者が漁業許可の又貸しをするなどといった点がある。又貸しを受けた者がさらに又貸しをすると、漁業区はどんどん細分化されていく。2年という期間に限定された使用権のため、もともとの管理者も又貸しされた者も、この期間内に最大限の漁獲高を得ようと腐心とする。規制はあつてないようなものなのだ。



氾濫原近くでの漁業

また、氾濫原に位置する漁業区では多くの場合、村がその内側に存在する。そのため、漁業区の使用規定によって、漁が解禁される時期に「住民のための区域」が設定される。しかし、実際のところ、この区域への立ち入りには漁業区を管理する者の許可が必要となる。くわえて、そのような区域は通常、境界線が明らかでない上、漁業区の管理者がしばしば漁業区を勝手に拡大して零細漁民を締め出したり、入漁料を要求する。つまり、零細漁民は、何世代にもわたって魚をとってきた場所に足を踏み入れることさえ拒否されるのだ。漁業以外でも、浸水林で薪を採取したり、村の間を移動する時に横切ったり、はては悪天候の際に一時的に避難場所に選んだからという理由で、「侵入者」として罰せられることも多い。漁業区に雇われている武装した護衛（多くの場合、軍人や警察官、民兵）によって脅しを受け、殺されることもある。

調査用とされた73の漁業区についても、その使用権は闇で取り引きされる。中央政府の干渉が少なくなったため、規定以上の使用料金が設定されるなど、州政府の役人と漁業区の管理者の癒着もはなはだしく、違法行為も著しく増加した。しかし、問題を認識したフン・セン首相は、「調査漁業区も公開入札にするべきだ」と主張し、2001年の漁業制度改革では19の調査漁業区が廃止され、54が範囲を縮小されている。



市場へと運ばれる干物

漁業区の外では、零細漁民のほかにも、地方の役人、軍人、民兵、警察官、商人などが漁場の使用・管理をめぐるせめぎあっている。管理基準はまったく存在せず、利益追求が中心となる。そのため、ここでも漁業を行う人びとは、漁業ができる時にとれるだけの魚をとろうと奔走する。魚が減少して、貧困にあえぐあまり、漁業区に無断で侵入し、いわゆる「密漁」を敢行する住民も多く出てきている。聞き取りにもあるように、零細漁民は漁業法によって小規模の漁具の使用のみを許されているが、すでに毎日の生活を成り立たせるだけの魚すらとることができなくなっている。結果的に、零細漁民ですら何らかのかたちで違法漁業に携わっているのである。このようにして、漁業区の内外地で、「限られた期間内にとれるだけとりまくる」という動機付けが発生し、違法漁業の拡大が必然化している。禁漁期も無視され、1年中違法漁業が行われるほどである。これが、漁業資源の枯渇や、漁業区関係者・零細漁民間で頻発する漁業紛争といった結果をまねいている。

本来は、漁業局の役人が違法漁業を取り締まる役割を担っている。しかし、18ドル（約2000円）の安い月給では役人たちも暮らしてはいけない。そのため、違法漁業を目こぼしして、そのみかえりに賄賂を受け取る行為が慣例化している。制度を管理する立場にある高官の黙認を得つつ、漁業区の管理者とも結びつくという汚職の構造があるのだ。もちろん、違法漁業をきちんと取り締まる役人もいるが、逆に違反者に暴行を受けたり、ひどい場合は殺されてしまうなど、取り締りも命がけと言える。

漁業活動の区分

1987年の漁業法（2004年現在改定中）では、内水面の漁業活動が「大規模漁業」（商業漁業）、「中規模漁業」（認可制漁業）、「小規模漁業」（家族漁業）の3つに分類されている。それぞれの定義は以下の通り。

大規模漁業

政府が公開入札を行い、落札者には特定の漁業区における2年間の独占的な操業許可と、大規模漁具の使用権が与えられる。それぞれの漁業区には、漁を行って良い時期や場所、使用可能な漁具の種類や数、許可料の支払い方法を定めた管理規定がある。さらに漁業区を運営・管理する者には、漁業区内の生物を保護することが義務付けられ、それを口実に護衛を雇い入れている。2000年の調査によると、カンボジアにはこのような漁業区が136カ所、総面積9387平方キロ存在し、その中にはもっとも生産性の高い漁場が含まれている。また、多くの漁業区には、多様な魚の産卵や繁殖、生息に欠かせない浸水林を擁する氾濫原も含まれている。1999年に73の漁業区が調査漁業区に切り替えられ、公開入札はなく交渉で4年から6年の操業許可が与えられるようになった。

中規模漁業

定められた境界線の枠内で、免許を購入した者のみが漁業を許される。とれた魚の売買も可能である。政府が漁業方法を定めている。漁業の期間や場所に関する規定は、中規模漁業を念頭に設定されてはならず、10月から6月の漁が解禁となる時期に大規模漁業区の境界線内に入らなければ良しとなっている。ただし、免許取得料が、少ない給料や財源を不満とする地方政府役人たちの収入源になっているため、無制限に免許が発行される。各州の漁業局職員が、勝手に免許発行の基準を決めてさえいた。2001年には、「生計が成り立たなくなっている零細漁民の現状を考慮する」という名目で免税となった。しかし、実際には地元の警察官や軍人、漁業局の職員が漁民から金をまき上げている。結果として、漁民が払う「料金」は同じであり、それが国庫に入るか、役人のポケットに入るかの違いなのだ。

小規模漁業

政府が管理し、小さな漁具の使用のみが許される。いつ、どこで魚をとってもかまわないが、10月から6月の漁が解禁されている時期に漁業区で魚をとることは禁止されている。中規模漁業との違いは、自給の目的に限った漁業のみが許されている点で、とれた魚を売ることはできない。使用可能な漁具の規模や使用方法は最低限のものに限定されている。1998年にデンマーク国際開発援助（DANIDA）の支援で行われた、漁業を営む世帯を対象とした調査では、調査対象の4%が大規模漁業、9%が中規模漁業、87%が小規模漁業に従事しており、小規模漁業に従事する人びとの数が圧倒的に多いことがわかっている。

住民が「魚がとれなくなっている」と言う声の背景には、この項で述べてきた漁業管理制度の弊害がある。もっとも被害を被っているのは、家族で漁業を営む住民であり、こうした人びとは魚がとれないため窮地に立たされている。

こうした状況を、さらに加速させている要因がある。第一に、近年の経済活動の活発化にともなう漁業の産業化だ。トンレサップ湖からの漁獲量は確実な統計資料がないためさまざまな数字で語られるが、アジア開発銀行は、2004年の時点で、およそ23万トンが妥当だろうと推定している(ADB 2004b)。これは、カンボジアにおける内水面漁業の水揚げ量の半分以上を占めている。内水面漁業からの収入は、国内総生産の16%を占めるなど、カンボジアにとって重要な外貨獲得手段である。みるべき産業の少ないカンボジアでは、高い値のつく魚種を鮮魚や幼魚のままベトナムや中国、シンガポール、タイなどへ輸出している。天然資源が外貨獲得のもっとも有力な手段のひとつとなっており、その傾向はますます強まっている。



魚の養殖場



細かい網目のネットで稚魚まで根こそぎとる。



違法漁業で大量にとられる魚

日々とれる魚が減るため、住民は窮地に立たされている。



第二の要因として、人口増加がもたらす漁業資源への依存度の高まりがある。カンボジアの人口は、過去20年間で3倍に膨れ上がり、毎年平均約30万人の若者のために新規雇用を創出する必要がある。トンレサップ湖周辺での人口増加率は他の地域に比べて高い。農村には急激な人口増加を吸収するだけの雇用機会もないため、退役軍人や帰還難民、非自発的に移住・移転させられた住民、とりわけ土地を持たない住民が湖で漁業を始める例が多い。当座の生計手段を求める人びとにとっては、農業よりも漁業の方がリスクも敷居も低い。そのため、漁業に参入する人びとが増えているのだ。例えば、農業を实践するには、土地や家畜、預金、村での人間関係が必要条件であるし、種、肥料、農薬の購入にも資金がかかる。一方、漁業は1人でもできる上、小規模な漁具は比較的安く手に入り、投資に対して即座に食料と現金のみかえりを回収することができる。極貧にあえぐ人びとでも、漁業でなんとか食べていけるのだ。しかし、多くの人びとが漁業に携わる結果、以前と比較すると、同じ労力をかけてもとれる魚の量が減っている。トンレサップ湖の漁場は生活・生計手段を求める人びとであふれ、1人当りの漁獲高が減少する一因ともなっている。



電気ショックで感電死した魚

違法漁業

違法漁業の規模や頻度を示す数字はないが、地元で活動するFACTによって、その方法が明らかになっている。

- 電気漁具 変圧器につないだ自動車のバッテリーで、無差別に魚を感電死させ、つかまえる。比較的安くて効率的な方法のため、小・中規模に漁業を営む者たちが好んで使う。FACTの調査では、コンポントム州のドムラアウ村で、およそ90%の漁民がこの方法によって漁を行っていた。
- 爆破 手榴弾を投げ込んで魚をとる。軍人や警察官が行っているとの報告がある。
- 毒薬 農薬や樹皮などの毒物を、魚が集中している狭い川や水路に流す。
- ポンプによるくみ出し 雨季の終わりが湖の周辺に出現する池の水をポンプですべてくみ上げ、細かい目の網でその水の中にいる魚を根こそぎにつかまえる。雨季の終わりに出現する池の水は農業用水になるため、住民が大きな打撃を受けており、住民間の衝突の原因ともなっている。
- サムラ 束ねた木の枝を魚の棲家である浸水林に見せかけ、魚を引き付け捕獲する。安い方法で高値のつく魚がとれるため、零細漁民もよく使う。日本では「柴漬け漁」のこと。(2-1を参照)
- 電気・鋸 雷魚の生魚をつかまえる際に使う。
- 刺し網・地引網 小規模漁業では網目が1.5センチ以下の蚊帳を使い、小さな魚もとってしまう。また、漁業法では、10メートルまでの刺し網を使った家族漁業が許可されているが、守っている人はいない。100、400、700メートルという大きな刺し網が用いられている。
- モーター付船舶の使用 大きな網の両側をモーター付の船で引っ張ったり、船の前後に網を取り付けながら走行して、魚をつかまえる。
- 柵 板と板の隙が1.5センチ以下の柵を水中に設置して、稚魚を含めた小魚まで、いっさいがっさいとってしまう。
- 稚魚・幼魚の捕獲 稚魚・幼魚の捕獲は禁止されているが、ベトナムへの輸出用にナマズなどの高価な魚が狙われる。1998年には、ナマズの幼魚が約21億匹も捕獲されている。

漁業紛争

漁業をめぐる衝突は、漁村の住民、陸地から移動して季節的に漁を行う人びと、漁業区の管理者、警察官、軍人、地方政府の役人などの中で起こっている。その背景には、利潤追求、トンレサップ湖で自給的な漁業を営む人びとの増加、浸水林で得られる農地、水、薪への需要の高まりなどがある。零細漁民が大規模な違法漁業に抗議する署名運動を行ったり、漁業局が違反者を逮捕・拘束し、違法漁業区を差し押さえるなどといった動きもみられるが、かえって暴力的な弾圧や人権侵害、銃による殺人・暗殺などをまねく結果にもなっている。漁業区の護衛が武装している点もこうした状況に拍車をかける。州ごとの調査では、バタンバン州の9つの漁業区では82人の護衛が64丁の銃を、コンポチュナン州の6つの漁業区では51人の護衛が128丁の銃を、ポーサット州の5つの漁業区では42人の護衛が204丁の銃を、それぞれ保持していることが判明した。漁業紛争は年々過熱してきており、多くの場合交渉よりも力で「解決」される。

最後に、環境の変化について言及する必要がある。この章でも多くの住民たちが訴えているように、トンレサップ湖では水質汚染や流量の変化、堆積物の増加、浸水林の破壊など、自然環境が大きく変化している。メコン河委員会の調査報告書によれば、メコン河の魚は比較的早く成魚になり、大量の数の卵を産む。またその孵化も早い¹ため、結果として高い自然死亡率を補っている。そのため、一方で、ほとんどの魚種が乱獲よりも環境の変化に敏感に反応するというのである。したがって、漁業を持続可能にするためには、漁業の管理体制だけでなく、環境管理にもっと力を入れる必要がある (Bao 2001 in Keskinen 2003)。同じくメコン河委員会は、チャト・ムック (「4つの顔」) と呼ばれる川の合流地点での堆積物の増加が、メコン河からトンレサップ川への水の流量を減少させており、これが魚の数を減少させている可能性があるという (MRC 2001 in Keskinen 2003)。第 2-1 項でも見たように、今後は、急速に進んでいるメコン河の上流や支流での開発が川の流量を変えることで、さらにトンレサップ湖の水をとりまく環境が変化し、漁業資源のあり方に影響を与えることが懸念される。



浸水林が伐採された後の平地。農地として使われる。

トンレサップ湖における貧困は、カンボジアのどの地域よりも深刻といわれる。



日々の暮らしと栄養源を何よりも魚に頼っている住民たちには、魚がとれないことの打撃はとてつもなく大きい。いざというときのセーフティ・ネットにしてきた浸水林も、どんどん破壊されている。飲み水をはじめとする生活用水も汚染がひどい。トンレサップ湖に暮らす人びとの貧困は、カンボジアのどこよりも深刻だという。カンボジア国内のどこと比べても、健康被害と慢性疾患が貧困の主要因になっているという (ADB 2004a)。



タライで移動する子どもたち

第3章

問題解決に向けた動きと残される課題

むかしと今の違いを感じます。むかしは魚が豊富にとれました。少ない人口で、むかしながらの暮らしをしていました。そのころは、村のみんなで資源を分かちあっていましたし、日々の生活に必要なぶんだけ資源を使いました。いまでは、ほとんど魚を見なくなりました。村の人口は増え、市場経済に依存した暮らしに変わりました。いまは資源をめぐる人同士が争いますし、資源の価値をお金で計ります。市場経済は、金もうけのために資源を収奪する人たちの存在を許しているのです。

ソル・レットさん

(バタンバン州エクプノム郡アンロン・タオウー村在住、2-1と2-2を参照)

実際の資源管理に 反映されない政策

今回私たちが話を聞いた住民たちは、自分のまわりの環境が破壊されてゆく原因を知った上で、状況をきちんと理解しているようでもあった。生活排水の増加や浸水林の伐採、違法漁業などは、自分たちもまた原因の一部となっている。ただ、天然資源に頼って生きる人びとは、資源を「収奪」しない限り生きていくことができない。今の状況では、自分が資源を浪費しないように努めても、きっと村のほかの誰かがそうするのだ。結果として、環境の荒廃を止めることはできず、貧困も広がっていく。生まれてからずっとトンレサップ湖に暮らし、漁業を生業にしてきたため、多くの住民は、漁業以外に生きる術を知らない。変りゆく環境の中でも、これまでどおり、毎日必死に魚を追い求めることしかできない現状がある。そして、住民の力だけで、この悪循環を断ち切ることは難しい。

年々荒廃する環境と深刻化する貧困問題をどうにかしようと、1990年代から、カンボジア政府や国際援助機関、NGOが、トンレサップ湖において天然資源管理に焦点をあてたさまざまな取り組みを行っている。しかし、本書に収録されている住民の声が2003年時点のもので、今日でも依然として問題の深刻さがうかがえることから、なかなか状況が改善されていないのは明白だ。問題解決を阻む課題のすべてを論じる余裕はないが、本章では特に重要だと思われる3点に絞って述べてみよう。

輸出のためにとられた大量のナマズ



カンボジア政府は国際援助機関の支援を受けつつ、トンレサップ湖の水、森、魚などの資源管理と環境保全に関して、1990年代はじめからいくつかの対策を講じている(表1を参照)。例えば、水質管理に関する法律が施行されたり、浸水林や漁業を共同で管理するための「閣僚会議令」(いわゆる「政令」)案も公表されているし、野生生物の保護を目的とした生物保護地区も指定されている。

1993	・保護地域の設置と指定に関する王令で、トンレサップ湖を多目的地域に指定
1995	・環境省内に、トンレサップ湖地域の環境保全のための技術調整部を設置
1996	・環境保全・天然資源管理法を施行 (トンレサップ湖の環境保全に関する最初の省庁間フォーラムが開催される)
1997	・トンレサップ湖地域がユネスコ(UNESCO)の生物圏保護地域に指定される ・国家環境行動計画(NEAP)の策定 (優先順位の高い課題として、トンレサップ湖の漁業と氾濫原での農業があがる)
1998	・新森林法案、コミュニティ林業設置に関する閣僚会議令案が検討される (対象とする森林には、トンレサップ湖の浸水林も含まれる) ・トンレサップ湖保護のための戦略と行動計画(SAPPTS)の採択
1999	・国家湿地帯行動計画(NWAP)の採択 ・水質汚濁防止法、固形廃棄物管理法の制定 ・環境影響評価法の採択
2001	・王令によりトンレサップ生物多様性・生物圏保護地域が設置される (持続可能な資源管理が目的となり、8カ所に魚の保護区域が設置される) ・政府行動計画(GAP)の採択 (貧困層の資源へのアクセスを含む天然資源管理方法を規定する) ・漁業制度の改革 (新漁業法案、コミュニティ漁業設置に関する閣僚会議令案を検討)

表1 トンレサップ湖の環境保全に関連する政策と政府の動き(笠井2003、Experience and Lessons Learned Brief for Tonle Sap 2004をもとに作成)

しかし、カンボジア政府の中に、トンレサップ湖の天然資源管理を総合的に担当する組織は存在しない。また、資源管理の責任は各省庁間でばらばらになっており、調整もされていない(Experience and Lessons Learned Brief for Tonle Sap 2004)。例えば、トンレサップ湖の浸水林の管理をめぐるのは、浸水林のある場所は漁業優先地域になっているため、事実上、漁業局が責任を持つ。そのため、森林野生生物局の関与は弱い。しかし、浸水林を住民の共同グループで管理させるコミュニティ林業設置の政令案は、森林野生生物局から提出されている。一方、浸水林に生息する野生生物の保護は、生物多様性保全の観点から環境省の管轄となりつつある(笠井2003)。

その上、各省庁に責任があるといっても、すべての省庁で人材が不足しており、執行体制が確立していない。例えば、法は整備されているものの、住民の声にもあったように、鉱山、工場、都市などからの廃水は規制されていない。漁業区の問題(2-3を参照)でも見たように、職員が薄給ゆえ責任をもって働かず、広範囲にわたって汚職が蔓延している。

トンレサップ湖の資源を管理・保護する目的で、政策は数多く準備されているが、実施体制が整っていないため実際にはほとんど効果がない(Experience and Lessons Learned Brief for Tonle Sap 2004)。トンレサップ湖の環境が悪化し続ける背景には、カンボジア政府が慢性的に抱える課題が横たわっているのだ。

見切り発車で行われる 資源の共同管理

中央政府による管理では環境がさらに悪化し、貧困問題も拡大するという事情も手伝って、カンボジア政府は国際援助機関などから、資源管理の新しい方法を導入するよう求められてきた。この要請を受けて、カンボジア政府は、トンレサップ湖の魚や浸水林などの資源を住民グループが共同で管理する「資源共同管理方式」を導入した。

例えば、2001年はじめには、カンボジアの全漁業区の56%が、「貧しい人びとが漁業で生計を立てられるように」との目的で、開放された。この時から、トンレサップ湖の住民は、漁業を共同で管理する「コミュニティ漁業」によって、漁業資源を保護・管理するよう義務付けられたのである。

ところが、コミュニティ漁業の導入は見切り発車だったと指摘するNGOや研究者も多い。漁業区が住民に開放されたのは良いことだが、コミュニティ漁業に関する閣僚会議令については、草案が出ただけで管理体制がまだ十分に整っていない。2001年の2月には、漁場の管理を住民に任せるために、トンレサップ湖に駐在していた漁業局の職員が持ち場から呼び返されたが、その結果、違法漁業を規制する者がいなくなってしまった。その直後から、「トンレサップ湖史上もっともひどい乱獲漁業」が昼夜を問わず行われた。その後2001年6月に、漁業局の職員は元の持ち場に戻った。

カンボジアには、住民が共同で資源を管理することが難しい歴史的・政治的背景もある。クメール社会は歴史的に階層社会で、下層の人びとが上層の人びとと、「パトロン-クライアント（親分-子分）関係」を保ちながら働いてきた。例えば、1998年の調査では、村の中に、協同組合や漁業協会など、家族以外の組織がひとつも確認できなかった。さらにカンボジアには、クメール系、ベトナム系、チャム系をはじめとする多様な民族が居住する上、互いに反目しあっていることから、ひとつの集団・組織としてまとまることは非常に難しい。「国内移民」も多く、強制的に集団化させられたポル・ポト政権時代のトラウマもある。貧富の格差も拡大しており、



漁業総合計画についての公聴会

村に多様な組織が存在しない要因はきわめて複雑である。すなわち、カンボジアの漁民たちは、これまでに一度も体験したことのない方法で、漁業を共同管理するよう義務付けられたことになる。にもかかわらず、漁民に対する訓練や支援は十分に行われていない。そのため、開放された漁場に立ち入る権利をめぐる混乱が生じ、かえって歯止めのきかない乱獲や違法漁業を誘発してしまった（FACT 2001）。乾季にのみ漁を行う人びととそうでない人びとの競合も考慮されていない。新しく導入されたコミュニティ漁業を支える立場にある漁業局の職員が、薄給がために再び汚職に走らないよう、十分な給与と研修を施すことも強く求められている。

これまでに264のコミュニティ漁業グループが立ち上がったが、カンボジア政府は、コミュニティ漁業のあり方について、住民の意見や意向をほとんどくみ入れていない。例えば、2004年、トンレサップ湖湖岸の6つの州と海岸沿いの1つの州に住む人びとが、コミュニティ漁業のあり方について内閣と漁業局へ要請書を提出した。しかし、政府は、「住民の意見は非科学的で、根拠がない」と突っぱねるだけで、10項目からなる要望（囲み「コミュニティ漁業に関する、住民の対政府要請書簡の主な内容」を参照）のうち、聞き入れたのはただのひとつであったという（Cooperation Committee for Cambodia 2004）。「住民による資源の共同管理」と立派なスローガンをかかげても、実際には住民の声がほとんど無視されているという皮肉な現状がある。

総じて、カンボジアのコミュニティ漁業は、「住民が、ほとんどなじみのない方法で、主体的に資源を管理する」というきわめて難しい課題に直面している。カンボジア政府は、2015年までに589のコミュニティ漁業グループを立ち上げるとの目標をかかげている（前掲書）。しかし、カンボジアのNGOは、十分な時間と支援なしに見切り発車的にコミュニティ漁業を進めると、かえってこれまでの不公平なシステムを再来させてしまうと懸念している。



公聴会で発言するトンレサップ湖の住民

コミュニティ漁業に関する、 住民の対政府要請書簡の主な内容

以下の要請項目で政府に聞き入れられたのは5番目だけだった。

- 1. 住民にコミュニティ漁業グループをつくる権利を与えてほしい。**
コミュニティ漁業を担うグループをつくるには、郡と州の当局、漁業局、農林水産省と、政府の各層すべてに伺いを立てなければならず、時間と煩雑な手続きを要する。そのため、首都プノンペンから遠方に居住する住民には大きな負担となっている。住民自身が自主的にグループをつくり、自分たちの漁場や資源を管理する責任を持つことを許可してほしい。
- 2. 漁業局の判断のみでコミュニティ漁業を中止しないでほしい。**
現行の制度では、漁業局が、住民の合意なしにコミュニティ漁業の中止を決定する権利を持つ。中止するか否かの決定には、コミュニティ漁業に関わる住民の意見を反映させてほしい。
- 3. 住民に漁具を選ぶ権利を与えてほしい。**
コミュニティ漁業を行う住民は、とれた魚を売ることも生活を支えているが、現在は自給のための漁業しか許されておらず、漁具の使用にも制限がある。しかし、今の制度で許可されている漁具のみだと、生計を立てるだけの魚がとれない。住民が生計を確保するための漁具の使用を認めてほしい。一方で、中規模漁業では、販売目的で魚をとることができ、免税措置が施されている。すなわち、住民が、コミュニティ漁業に参加しない方が得をする状況になっている。住民に対して、資源を管理する義務だけでなく、活用する権利も与えてほしい。
- 4. 住民に、違法な漁業を行う者を逮捕する権利を与えてほしい。**
現行制度では、住民が活動する時にいちいち漁業局の許可をとらなければならない。違法な漁業を行っている者を発見した場合でも、逮捕してよいかどうか漁業局に伺いを立てなければならず、時間と手間がかかる。自分たちの漁場で違法に漁業をする者がいた場合、その場で逮捕できる権利を与えてほしい。
- 5. コミュニティ漁業連盟の設立を認めてほしい。**
近隣の村と連携することで、漁業をめぐる衝突や紛争を回避することができるし、違法な漁業を減らすこともできる。コミュニティ漁業グループを横断する組織の設立を認めてほしい。

商業漁業制度の改善の遅れ

コミュニティ漁業が導入されたあとでも、魚が十分にとれない住民たちは違法な漁業を続ける。浸水林の天然資源に頼って、木々を切る。減りゆく浸水林が土壌を支えきれず、浸食を起こしてはトンレサップ湖の水を濁らせる。しかしながら、トンレサップ湖では、住民が行う漁業以上に深刻な違法漁業や乱獲が続いている。その背景には、漁業区の約半分が住民に開放された後も、依然として漁業区制度の存続が黙認されているという事実がある。調査漁業区も、そのすべてが入札制度に切り替わったわけではない。漁業区を管理する者たちは、自分の漁業区を住民に開放する前に、魚をとれるだけとてしまふ。住民に開放された漁業区も、ほとんどが生産性の低い漁場であったという (Cooperation Committee for Cambodia 2004)。

漁業セクターはカンボジアの「強み」として、政府が産業化を進めているが、セクター自身がどのように機能しているか、住民にどのような影響をおよぼしているかについてはほとんどわかっていない (Cambodia Development Research Institute 2003)。2003年にカンボジアのある研究所が行った調査では、魚の輸出にかかる手数料のうち、漁業局が回収するのはわずか20%で、残りの80%は漁業管理とはまったく関係のない機関 (警察や道路会社) が集めているという。すなわち、商業漁業からの収入が、漁場の管理に運用されていない可能性が高い。また、住民は魚を売る際に、非常に高い手数料をとられるため、結局手元にはわずかな収入しか残らない。その結果、たくさんの魚をとる必要が生じてくる。コミュニティ漁業のみが導入されても、商業漁業制度のあり方自体にメスを入れない限り、天然資源の収奪・浪費は防げないのである。

漁業区が直面する課題については、これまで莫大な資金をつぎ込んで、トンレサップ湖の資源管理や貧困削減プロジェクトを支えてきた、国際援助機関の功罪を問うこともできる。カンボジアで活動するNGOが指摘するところでは、援助機関はカンボジア政府

と同様に、漁業資源が人びとの生活に果たす決定的な役割を過小評価してきた可能性がある (Gum 2000)。漁業制度の弊害がずっと指摘され続け、記録されていたにもかかわらず、援助国や援助機関がその改革を推進してこなかったからである。国際世論が森林セクターを注視していたため、漁業セクターに対する援助国・機関の支援がなおざりになり、制度改革がなかなか進んでいないという背景もある (国際協力事業団 2001)。

漁業が人びとの生活に果たす役割を過小評価する傾向が依然として払拭されていない点を想起させる事例が存在する。アジア開発銀行は、トンレサップ湖の環境改善や住民の貧困削減を目的として、シェムリアップ州のチョンクニアス集合村 (巻頭の地図を参照) に近代的な港湾施設を建設する計画に対して、資金援助を検討している^{※5}。その論理は、船着場が混雑しており、環境が悪化しているという認識に始まり、そのために住民が貧困化し、船着場周辺の水上生活者が営む漁業が水質汚染の原因となっているとの (多分に独断的な) 帰結に至る。その上で「解決策」として、乾季にも雨季にも使用できる近代的な港をトンレサップ湖の雨季の満潮線に沿って建設し、貧困のために水質汚染の要因となっている水上生活者を港の横の埋立地に移転させ、結果として環境を改善するという提案がなされているのである。乾季になると、新設の港が湖本体から離れてしまうが、この課題は湖底に運河を掘って両者をつなぐことで解消する (Plancenter et al. 2003)。揺籃期のコミュニティ漁業をはじめ、商業漁業を管理する体制が未整備な段階で、近代的な港湾設備だけが建設されれば、活発化する経済活動に歯止めをかけることができず、トンレサップ湖の資源収奪にますます拍車がかかることが懸念される。また、微妙な生態系の上に成り立つトンレサップ湖に近代的な港を建設すれば、予測不可能な環境影響も生じかねない (メコン・ウォッチ 2004)。そのしわ寄せをもっとも受けるのは、ここにその声を紹介した湖上で暮らす人びとなのだ。

今後も増加する可能性のある、外部者による開発援助。ひとつひとつの開発行為は累積的な環境影響をもたらす。国際援助機関は、いくら政策立案や住民による資源管理を支援したところで、資源の収奪を助長するようなプロジェクトを推進しては、いつまでもトンレサップ湖の環境の悪化を止めることはできない。援助機関は、なによりも、トンレサップ湖の自然環境と漁業資源が、そこに居住する人びとの生活に不可欠なものである点を忘れてはならないし、そうした援助機関に対して、私たちを代表する日本政府が多大な影響力を行使しうる点に注意を喚起したい (「はじめに」を参照)。

トンレサップ湖の複雑な生態系のバランスを回復・維持するには、そうした根本的な課題への取り組みが求められている。今後はまた、中国やラオスなどのメコン河上・中流域で急速に進む開発の影響、とりわけ水量の変化や堆積物の増加によるトンレサップ湖の環境への影響もますます顕在化すると予想される。これらの大きな課題に対して、なによりも、湖とともに生きる人びとの意見や意向が十全に取り入れられるかたちで、さまざまな関係者がどのように対応していくのかが問われるだろう。カンボジアの最大の援助国である日本の市民もまた関係者であることをまぬがれない。私たちには、トンレサップ湖を取り巻く環境に関心と監視のまなざしを送りつつ、時には行動をもって参加する必要と責任があるだろう。

※5 2005年1月、この計画は「中止」となった。カンボジア政府が、移転対象となったベトナム系住民に補償を行う点に難色を示したためだという (在カンボジア・ベトナム系住民に対しては、クメール系住民の反感もあり、政府がそれを代弁した形になっている。2-3を参照)。しかし、アジア開発銀行は「トンレサップ湖には港が不可欠」という姿勢を変えておらず、今後もトンレサップ湖での近代港湾設備建設の動きが弱まることはないだろう。

数百メートルにわたり設置されている違法漁具



日干しされる大量の魚



参考文献

【和文】(あいうえお順)

- 国際協力事業団 (JICA) (2001) 『カンボディア国別援助研究会報告書 - 復興から開発へ -』 国際協力事業団
- 笠井利之 (2003) 「カンボジア・トンレサップ湖地域の環境保全についての予備的考察」 『立命館国際地域研究』 第 21 号 (2003 年 3 月 20 日発行) :41-64
http://www.ritsumeiji.ac.jp/acd/re/k-rsc/ras/pdf/kt_kiyo/21/kasai.pdf
- 松本清嗣 (2004) 「カンボジア・トンレサップ湖の明と暗 - NGO 『るしな』 が仕掛ける草の根活動とアドボカシー -」 第 24 回メコン談話室 (2004 年 7 月 30 日)、メコン・ウォッチ
- メコン・ウォッチ (2004) 「メコン・ウォッチ・ファクトシート: トンレサップ湖港湾建設プロジェクト」、メコン・ウォッチ
- メコン・ウォッチ (2005) 「メコン河上流浚渫プロジェクト」、メコン・ウォッチ
<http://www.mekongwatch.org/env/yunnan/rapidblasting/index.html>
- 柳星口 (2004) 『カンボジア、トンレー・サーブ湖地域における漁業制度の変遷と漁業紛争 - ポーサット州の事例を中心として -』 上智大学大学院外国語学研究科・地域研究専攻博士前期過程 2003 年度提出修士論文

【英文】(アルファベット順)

- Asian Development Bank (ADB) (2004a). The Tonle Sap Basin Strategy, *Future Solutions Now: The Tonle Sap Initiative*, November 2004, ADB, Manila, Philippines.
<http://ait-adb.ait.ac.th/TonleSap/Documents/Tonle-Sap-200411.pdf>
- ADB (2004b). Tonle Sap Sustainable Livelihoods, *Future Solutions Now: The Tonle Sap Initiative*, December 2004, ADB, Manila, Philippines.
<http://ait-adb.ait.ac.th/TonleSap/Documents/Tonle-Sap-200412.pdf>
- ADB (2004c). Reconciling Human and Nature, *ADB Review*, December 2004, ADB, Manila, Philippines: 28-31.
- Cambodia Development Research Institute (2003). Great Lake Fish Exports: An Analysis of the Fee System, *Cambodia Development Review*, Vol. 7 Issue 3 : 1-6.
<http://www.cdri.org.kh/>
- Cooperation Committee for Cambodia (2004). *NGO Statement to the 2004 Consultative Group Meeting on Cambodia*, Phnom Penh, Cambodia.
<http://www.danida-cambodia.org/pdf/NGO%20Statement%20to%20the%202004%20Consultative%20Group%20Meeting-passw.pdf>
- Degen, Peter et al. (2000). *Taken for Granted: Conflicts over Cambodia's Freshwater Fish Resources*, Paper written for the 8th IASCP Conference, Mekong River Commission/ Department of Fisheries/ DANIDA, Phnom Penh, Cambodia.
<http://129.79.82.45/IASCP/Papers/degenp041100.pdf>
- Experience and Lessons Learned Brief for Tonle Sap (2004).
http://www.worldlakes.org/uploads/Tonle_Sap_Brief_20Jan04.pdf
- Fisheries Action Coalition Team (FACT) (in collaboration with Environmental Justice Foundation) (2001). *Feast or Famine?: Solutions to Cambodia's Fisheries Conflicts*, Fisheries Action Coalition Team, Phnom Penh, Cambodia.
http://www.ejfoundation.org/pdfs/feast_or_famine.pdf
- Gum, Wayne (2000). *Inland Aquatic Resources and Livelihoods in Cambodia: A Guide to the Literature, Legislation, Institutional Framework and Recommendations*, Consultancy report for Oxfam Great Britain and NGO Forum on Cambodia, Phnom Penh, Cambodia.
www.oxfamkong.org/documents/OGB_acquatic_cambodia.pdf
- International Development Statistics (IDS) (2005).
<http://www.oecd.org/dataoecd/50/17/5037721.htm>
- Keskinen, Marko (2003). *Socio-Economic Survey of the Tonle Sap Lake, Cambodia*, Water Resources Laboratory, Helsinki University of Technology, Helsinki, Finland.
http://www.water.hut.fi/wr/research/glob/egloshow/eglob_TonleSap.html
- Lakenet (2004).
<http://www.worldlakes.org/>
- Plancenter et al. (2003). *Environmental Impact Assessment for Chong Kneas Environmental Improvement Project* (ADB TA 3997-CAM), Draft report.
- Sithirith, Mak (2003). *The Water Voice of the Tonle Sap Lake: Fishing, Drinking, Bathing and Eating on the Water: A Story of People's Dependency on Water in the Tonle Sap Lake, Cambodia*, Fisheries Action Coalition Team, Phnom Penh, Cambodia.
- Somony, Thay, and Ulrich Schmidt (2004). *Aquatic Resources Management: The Tonle Sap Great Lake, Cambodia*, Paper presented at the International Conference on Sustainable Aquatic Resources are more than Managing Fish: The Eco-System Approach in Inland Fisheries and the Role of Intra-country Linkages, Penang, Malaysia.
www.cofad.de/download/draft-penang.pdf
- Tarr, Chou Meng (2003). Fishing Lots and People in Cambodia in *Social Challenges for the Mekong Region*, ed. by Mingsarn Kaosa-ard and John Dore, Chiang Mai University, Chiang Mai, Thailand: 347-369.
http://www.rockmekong.org/pubs/social/13_chou.PDF
- Van Acker, Frank (2003). *Cambodia's Commons: Changing Governance, Shifting Entitlements?*, CAS Discussion Paper No 42, Center for ASEAN Studies/ Center for International Management and Development, Antwerp, Belgium.
<http://143.129.203.3/cas/PDF/CAS42.pdf>



FACT (Fisheries Action Coalition Team)
「漁業活動連合チーム」とは

FACTは2000年、カンボジア政府が淡水漁業の制度改革に乗り出したのを機に、現地NGOと国際NGOからなるカンボジアNGOフォーラムの中で、特にトンレサップ湖周辺で漁業を営む人びとを支援していたNGOらによって設立されました。魚類をはじめとする淡水漁業資源は、カンボジア農漁村部の、とりわけ貧困層にとって非常に重要な栄養源です。FACTはそうした資源に依拠して暮らす人びとの生活を脅かしかねない政策や開発計画に住民らの声が反映されるよう、草の根の組織作りとその強化を行っています。また昨今では、漁業問題に関する調査研究にも取り組み、カンボジア政府やアジア開発銀行などの政策決定者に働きかけをしています。FACTは、カンボジアにおける持続可能な漁業資源管理が、魚に依存して暮らす人びとの資源へのアクセスを確保するようなかたちで実現することを目標としています。



メコン・ウォッチとは

メコン・ウォッチは、メコン河流域国における開発事業や開発政策の影響をモニタリングするために、1993年6月に設立されました。15年間にわたるベトナム軍のカンボジア駐留が終わり、カンボジア内戦終結・和平が進展した時期です。和平にともなって、カンボジアだけでなく、ラオスやベトナムを含めたメコン河流域諸国への開発援助が急速に拡大しました。1980年代からこの地域で草の根の援助活動を行っていた日本国際ボランティアセンター（JVC）などは、援助の拡大が現地の生活スタイルや環境を破壊するのではないかと懸念を持ち、開発のマイナスの影響をモニタリングし政策改善を提言するネットワークとしてメコン・ウォッチを立ち上げました。その後、1998年にネットワークから会員制の任意団体に移行し、2003年10月には特定非営利活動法人として再スタートを切りました。メコン・ウォッチは、メコン河流域の国々に住む人びとが開発の弊害をこうむることなく、地域の自然環境とそこに根ざした生活様式の豊かさを享受できることを目指します。

執筆 後藤歩
 編集・校正 土井利幸、東智美
 監修 松本悟
 発行 特定非営利活動法人メコン・ウォッチ
 東京都台東区東上野1-20-6丸幸ビル2階
 TEL:03-3832-5034 FAX:03-3832-5039
 電子メール・アドレス
 info@mekongwatch.org
 ホームページ
 http://www.mekongwatch.org
 情報提供・協力
 Mak Sithirith (FACT)
 写真提供 FACT、(特活)メコン・ウォッチ
 レイアウト 渡邊誠 (AXERA, Inc.)
 印刷・製本 ひのでぶりんと
 発行日 2005年3月31日





水の
声
The Water Voice of the Tonle Sap Lake



特定非営利活動法人
メコン・ウォッチ